博士学位論文概要

『源氏物語』引用表現論

―和歌および歌語表現を中心に―

中西　智子

序章　本論文の目的と構成―文学作品における引用と重層的世界の構築―

本論文は『源氏物語』をめぐる引用のあり方について、現実世界で進行している出来事と虚構世界との重なり合う地点に置かれた〈ことば〉の担う重層的な意味内容とその機能の把握を行うものである。第一部では物語の内部で先行作品がどのように引用されているかという視点から、和歌および歌語表現の引用を中心に、それらの〈ことば〉が形づくる重層的な表現世界の様相を探究する。このことはテクスト自身による自律的な展開としてではなく、作り手の手法として扱うべき問題であると思われる。また第二部では物語の外部でこの作品がどのように引用されているかという視点から、紫式部の周辺で直接のかかわりを持つ人々の和歌に見られる『源氏物語』の〈ことば〉について、その同時代的な存在意義を考察する。特に紫式部のほか、物語の制作にかかわる様々なレベルでの「作り手」側の人々について、享受者でもあり同時に制作者側の領域に属する彼らにとって『源氏物語』の共同的な記憶が果たした役割を考える。

第一部　『源氏物語』に見える引用の諸相―人物造型にかかわる手法の多様性―

第一章　女君の官能性の形象―古歌・歌語・歌謡の引用表現から―

第一章では女君の官能性の形象にかかわる引用表現について、紫の君・女三の宮・玉鬘など「娘ざまの妻」といった幼さの要素を持つ女君たちと官能性との取り合わせ、および玉鬘と朧月夜における官能的な表現の反復などを例に論じる。

第一節　紫の君および女三の宮と〈誘う女〉の映像―蓄積された古歌と機知的応酬―

古歌を用いた機知的な応酬の中で、引用元のテクストが持つ文脈や世界観がどの程度意識されていたのかという問題について検討する。『拾遺集』前後の時期は「万葉復興」ともいうべき状況にあったが、この時期に書かれていた『源氏物語』に見られる万葉的な素材の引用は、そうした流行に対し相当に意識的なものであったと思われる。紫の君や女三の宮によって引用された万葉歌の〈ことば〉に内在する積極的な〈誘う女〉の映像は、引用した本人の意図をさらに一歩超えたところで機能する。こうした引用の手法には、ある種王朝的な規範美から外れたものへの“ごっこ遊び”的な趣向が認められる。

第二節　玉鬘における「根」と「寝」の重層的展開―植物に関する歌語と多義性の問題―

初期の玉鬘の造型と「根」の語との関係については、従来は玉鬘の出生や素姓といったいわば「ルーツ」の問題のみに絡めて考察されてきた。しかし玉鬘を取り巻く歌語としての「根」はこうした「ルーツ」の文脈に重層する形で、時には「寝る」などといった官能的な意味合いさえ掛けられながら、特に求婚譚の初期の巻々に多く散りばめられたものと考えられる。この語には重層的な機能があり、「ルーツ」の問題の一方で、「みくり」・「竹」・「若草」・「あやめ」・「撫子（常夏）」等それぞれの植物の和歌的な性格と有機的に結びつき、男性を惹きつける魅力的な女性の雰囲気を演出する役割をも併せ持つものである。

第三節　欲望の「くさはひ」としての玉鬘造型―催馬楽・風俗歌・万葉歌の古めかしさと斬新さ―

玉鬘求婚譚における玉鬘の役割は、六条院にあって強烈な女性的魅力の源となることである。玉鬘のこうした魅力は、玉鬘十帖の前半部に見られる催馬楽引用による華やかな掛

け合いのさま、また風俗歌引用による艶めいた雰囲気、万葉歌に由来の「赤裳」の心象がもたらす官能性などによって具現化されている。正統的な和歌とは違う、こうした歌謡に独特の語の引用を通して、玉鬘周辺には野卑とも言えるような強い恋の気分が演出されている。歌謡や『万葉集』由来の歌語の引用は、『源氏物語』成立の当時においては古さと新しさの二重性を帯び、読者にかえって新鮮な印象を与えていたと考えられる。

第四節　朧月夜および玉鬘と〈藤原氏の女〉との恋―うたことばの反復と人物造型の重なり―

朧月夜と玉鬘には尚侍という職掌や藤原氏の女という立場の共通、さらに源氏にあやまちを犯させる官能的な魅力といった共通点がある。両女君のこうした側面を形象する表現としては、催馬楽『貫河』の詞章のずらした引用、「玉藻」の官能的な象徴性、「ふち」への「身投げ」と藤原氏の暗示、別れの場面に用いられる歌語など共通の〈ことば〉が多く見出される。両女君に関するこれらの表現の反復、同一の素材の重複といった文章の操作には、物語の作り手の「技」とも言うべきすぐれて意識的な創作の手法が表れている。

第二章　女君の〈老い〉の形象―浮舟・朝顔斎院をめぐる引用表現から―

第二章では女君の〈老い〉の形象にかかわる引用表現について、悲劇性と喜劇性の重なりという観点から、浮舟および朝顔斎院を例に論じる。『源氏物語』における官能性と〈老い〉の問題は、いわば「エロス」（生の本能に向かう力）への志向という点において逆説的に重なり合う。その意味で第一章と第二章とは連繋するものである。

第一節　浮舟と「世の中にあらぬところ」の希求―女君の隠棲願望と嘆老歌の系譜―

浮舟の物語では、東屋巻と手習巻で「世の中にあらぬところ」という語句が繰り返され、重要なキーワードとなっている。この語句の出典である『拾遺集』歌は「老い」と「遁世」のモチーフによる歌群に属しているが、そこには『万葉集』の戯咲歌や『古今集』雑下に共通する戯れの雰囲気があり、真摯な隠棲願望の一方で諧謔性を帯びていることがうかがえる。こうした点から、「世の中にあらぬところ」という語句は、これを引用する浮舟本人の意図からは離れたところで、悲劇と喜劇の二面性を帯びた世界観を内包しつつ、浮舟の物語全体を支えていくべく東屋巻に配されていると言える。

第二節　朝顔斎院および浮舟と〈墓場の女〉の情景―白詩「陵園妾」を相対化するまなざし―

手習巻における「陵園妾」引用について、従来は浮舟の哀れさのみを表現したものとみることが一般的であった。ただし手習巻における老尼らの描かれ方は、浮舟の運命に喜劇的展開の余地を残すものである。また、手習巻と類似する構図を持つ朝顔巻では、朝顔斎院と老婆らをめぐって「陵園妾」の引用が認められる。原典では女の孤独を憐れむという単一の主題があらかじめ設定されているが、『源氏物語』では、こうした悲壮感漂う主題を相対化するような捉え直しが試みられている。こうした点に、作り手の「陵園妾」の諷喩性を相対化する態度が示されていると考えられる。

第三節　浮舟の〈老い〉と梅香の記憶―『紫式部集』「さだすぎたるおもと」像との相互関連性―

手習巻後半部の「袖ふれし」詠の場面と『紫式部集』の絵をめぐる歌群に属する四六番

歌には複数の点において明らかな共通性が認められ、「画賛的和歌」（土方洋一）という作り手の俯瞰的な視点を媒介として関連するものと思われる。出家後の浮舟の造型と四六番歌の「さだ過ぎたるおもと」の描写とを重ね合わせると、女君と〈老い〉の可能性という問題設定の先に、〈老い〉を経て初めて得られる達観した明るさや、開き直った華やぎ、軽みなどのエロス（生の本能に向かう力）的なものを逆説的に評価するという作り手の指向が存在することが明らかになる。ここには、紫式部という同じ作り手による『源氏物語』と『紫式部集』という二作品間における相互関連性、相互補完性が認められる。

第二部　紫式部周辺の和歌と『源氏物語』―「作り手」圏内の記憶と連帯―

第一章　『為信集』と『源氏物語』との関わり―紫式部の母方の祖父「為信」の名を冠した家集―

第一章では『源氏物語』と紫式部の母方の祖父「為信」の名を冠した家集である『為信集』との関わりについての再検討を行い、『為信集』が『源氏物語』に先行する可能性の方が高いという結論を述べる。

第一節　『為信集』収載歌の詠作時期（一）―書名・詞書および本集の性質からの検討―

『為信集』収載歌の詠作時期の推定を形態的な側面から行う。天理本の存在から本集の成立時期は少なくとも鎌倉初期以前となる。また収載歌の詞書から、少なくとも六波羅蜜寺建立の応和三（九六三）年以降、かつ『本院侍従集』が成立してまださほどの年月が経っていない時期（天禄三（九七二）年以降間もない頃）の作である可能性が高いものがあることが確認される。さらに私家集としての雑纂的なありようや物語的な趣向の存在、また敬語の使用からうかがえる貴顕へ献上された形跡などから、本集の性質にかかわる諸要素は初期の私家集と共通する側面を持ち、それらの成立時期と近いと見て矛盾がない。

第二節　『為信集』収載歌の詠作時期（二）―歌語および発想の型からの検討―

『為信集』収載歌の詠作時期の推定を、和歌本文に使用されている歌語や発想の型の流行時期などの側面から行う。「唐衣」や「みのしろ衣」といった歌語、また「うきはし」という歌語を手紙に絡める趣向などは『後撰集』前後の時期に集中しており、ここから時期的な特徴が見出される。さらに『為信集』と酷似したフレーズを持つ他の和歌との先後関係について検討すると、源順など河原院グループの歌人が用いた比較的珍しい表現も取り込んでいると考えられる。なお『狭衣物語』や『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』といった物語の作中歌と酷似した表現が見られることから、これらの作り手の女房らが『為信集』を参照した可能性も想定される。

第三節　『為信集』と『源氏物語』の表現的類似―先後関係の再検討―

先行研究で特に注目されてきた「衣を脱ぎすべる女」・「なよ竹の折るる心」・「ひるくひ」などの一致については、『為信集』が『源氏物語』の場面に感銘を受けた上でそれを踏まえた虚構の作とするには必然性に疑問が残り、またそれらは『源氏物語』よりも以前の先行歌によって十分に詠出が可能な表現である。反対に『源氏物語』が『為信集』の表現を借りたと見た場合、その特殊なことばの組み合わせが物語に与えた影響がうかがわれる。こうした点から、『為信集』と『源氏物語』との先後関係について、類似の場面の表

現的検討から、『為信集』収載歌が先行する可能性の極めて高いことを改めて論証する。

第四節　自己表出の欲望と一族の戯画化

「為信」を紫式部の外祖父とした場合、創作主体としての紫式部の自己表出の欲望とその志向性が明らかになる。『為信集』の詞書の成立時期は定かではないが、紫式部が母方の祖父の珍妙な実体験を知った上で、それを自らの一族を戯画的にほのめかす場面に組み入れ、華を添えるという創作の経緯は充分に想定され得る。初期の巻々の執筆時における紫式部と読者達との距離の近さ、あるいは作品自体の内輪性のようなものが、こうした点に表れていると考えられる。

第二章　紫式部周辺における『源氏物語』摂取

第二章では紫式部と同時代の人々、主として彰子および彰子付女房達の和歌における物語表現の摂取状況を調査する。これらの人々は『源氏物語』成立の最も近い場所で、読み手でありつつ作り手の側にも位置していた特異な存在である。彼らの『源氏物語』に対する距離感を考察の対象としつつ、当時この物語が果たした紐帯的な機能を探る。

第一節　彰子および一条天皇による物語摂取

彰子および一条天皇の和歌には『源氏物語』からの引用の例が存在する。一条天皇に対する彰子の哀傷歌、また彰子と和泉式部による小式部内侍および嬉子への哀傷歌、一条天皇の辞世の歌などである。『源氏物語』の表現が天皇の辞世の歌に採用されたこと自体が大変な名誉であり、この歌が詠み置かれたことは、この物語が権威化されていく中で重要な局面であったと考えられる。

第二節　彰子付女房による物語摂取（一）―紫式部と伊勢大輔による贈答歌を中心に―

紫式部と伊勢大輔との間に交わされた贈答歌二組、および伊勢大輔が単独で詠んだ和歌二首は『源氏物語』とかかわるものである。これらは『源氏物語』の「作り手」側の人々による二次的な解釈が与えられた重要な例であり、また同時に、物語の表現に関する共同的な記憶が、両者の精神的な結びつきを補強する役割を果たしていると言える。また伊勢大輔が紫式部との直接のやりとりではない折に詠んだ和歌には、物語作者と親しい関係にあった者としての伊勢大輔の矜持が表れている可能性がある。

第三節　彰子付女房による物語摂取（二）―紫式部と同僚たちによる贈答歌を中心に―

紫式部と上臈女房である大納言の君および小少将の君との私的な贈答歌、さらに小少将の君を悼む加賀の少納言との贈答歌、続いて和泉式部や赤染衛門といった、各々が文学作品の担い手でもある同僚女房の和歌などには『源氏物語』とかかわりを持つ表現が散見される。娘である大弐三位賢子による物語摂取の様相については、私的な贈答と公的な歌との間でふまえ方の区別が明確に認められる。

第四節　「作り手」側でない人々による物語摂取―大斎院付女房らによる贈答歌―

『大斎院御集』に見える女房らの和歌には、『源氏物語』中の和歌に用いられた語句と非常に高い一致度を持つ例が認められるが、彰子や一条天皇、彰子方女房同士のやりとりに存在したような、物語の内容によりかかった心情の交流のようなものは見出すことができない。道長と政治的に良好な関係にあり、様々な物語を愛好する大斎院方でさえ、新作の『源氏物語』に対する理解は未だ十分ではなかったと考えられる。このことから、物語

からの物理的および心理的な距離と享受のあり方において、彰子周辺の人々とその他の人々の間には明らかな差異があることが看取される。

第五節　紫式部の次世代の人々による物語摂取―大弐三位賢子と男性官人らによる贈答歌とその周辺―

『源氏物語』が完成して間もない頃の男性による摂取例は大変稀少なものであり、男性達が和歌の中で『源氏』を確実にふまえ始めるのは、女性達の例よりも大幅に後の時期になる。また男性官人らの和歌への『源氏物語』摂取に際しては、彼らとの交渉や歌合における大弐三位賢子の働きが重要であった。この結論は、第一章で述べた『為信集』の成立時期が『源氏物語』より早いとする結論を裏付けるものとなる。

紫式部以外の「作り手」側の人々による高度で複雑な物語引用は、この物語への彼女ら自身の主体的なかかわりの深さを思わせる。またそうした和歌の応酬が、書写や編集作業を通じて直接制作の現場にかかわった人々ならではの内輪意識、連帯感などを促進したと考えられる。彰子を支える女房らをつなぐものとして、『源氏物語』の記憶の共有が果たした役割は決して小さいものではない。紫式部という女房の存在意義は、物語の執筆や彰子への教育だけでなく、こうしたコミュニティ内の連帯感を促進させる一種シンボル的な側面にもあったと言える。

終章　本論文のまとめと今後の展望

本論文では、現実と虚構の間で互いに影響し合う『源氏物語』の〈ことば〉の諸相とその意味内容について、特に和歌および歌語表現を中心に検証した。これらの〈ことば〉が物語の内部に引き込まれてくる場合、原典の持つ豊饒なテクスト世界が重層的に流入するものであり、『源氏物語』の作り手はそうした現象を虚構の創造の手法としてあえて意識的に利用している。同時にそうした〈ことば〉の群は作り手の操作によって大まかな形を与えられているのであり、われわれは物語の文章を詳細に読んでいくことで、その操作の道筋をたどり直すことが可能なのである。また一方で、ひとたび虚構の物語世界へ流入した〈ことば〉が再び物語の外部へ引き出される場合には、それぞれの折に応じて意味内容が具体的に限定使用されることになる。さらにこの物語の表現を借りるという行為自体に積極的な意義があるような場合には、紫式部本人によってもさまざまな場面のエッセンスが取捨選択され、ある時は強調されつつかなり便宜的に使用されている。

今後の展望としては、〈紫式部〉という作り手の存在をいかに扱うかという議論と関連して、『源氏物語』の成立圏および成立基盤について『紫式部日記』の表現なども視野に入れつつ考察を深めたい。紫式部の親族にまつわるテクストの問題では、まずは『為信集』の全収載歌について、改めて一字一句にわたる詳細な注釈を施す必要があるだろう。『惟規集』および惟規の和歌と物語の表現についても興味深い一致が散見され、ぜひとも検討したい問題である。また、彰子のみならず妍子の周辺で『源氏物語』が果たした社会的役割や、一条天皇による引用をはじめとするこの物語の権威化の問題などについても、当時の政治的な状況を視野に入れた上で考察する必要を感じる。現実の世界と『源氏物語』との交錯する様相について、今後も〈ことば〉の重層性を手がかりに解明していきたいと考えている。